

御所まち

伝建通信

文化財課 60・1608

第10回

外観から見る 建物の変遷 (1) 2階と木材

大きな木造建築の家を見ると、なんとなく古いと感ずますが、具体的な時代は専門家でないと判断しづらいものです。今回は、外観から建物の時代を判断するポイントを説明します。

左の建物2つを見比べてください。①は御所まちで最も古い大和棟の建物で(第8回参照)2階がありません。一方、天保12年に建てられた②は、「ツシ2階」という高さが低い2階建になっています。

「ツシ」の漢字表記は「厨子」で、物置部屋という意味があります。武士を支配層とする上下関係が明確化された江戸時代には、「町人は武士を見下ろしてはならない」というルールがあり、立って生活できるような本格的な2階建は禁じられていました。そこで、道路に面する



①江戸時代中期 (1750年頃)



②江戸時代後期 [天保12年(1842)]



③明治11年(1878)



④本2階建(上:大正) (下:昭和初期)



2階部分は、頭がぶつかるといえるような屋根裏部屋にし、外からは物置に見えるように工夫しました。ツシ2階には明かり取り程度の小窓しか設けることができず、その窓は虫籠窓に似ていることから虫籠窓と呼ばれます。建物にも時代の世相が反映されており、ツシ2階はそれがよく分かる良い例と言えるでしょう。御所まちでは、ツシ2階は江戸時代後半〜明治時代後半の建物でよく見られ、物置や使用人の居室として使用されました。

また、木材の太さからも時代を推測できます。江戸時代、山林は幕府や藩が管理しており、庶民はたくて立派な木材の使用が認められていませんでした。しかし、明治時代になると、山林は民間に払い下げられ、庶民も太い木材が使えるようになりました。

明治11年に建てられた③は、②と同様にツシ2階ですが、出格子の材木を見比べると③のほうが太いことが分かります。また、虫籠窓も大きく、材木も太いです。明治時代は、さまざまな規制が解かれ、好きなように家を建てるのが可能になりました。③の家は古い形式を踏襲しながらもデザインは開放的で、明治の自由な気分を感じることが出来ます。

大正〜昭和にかけて、居室空間としての2階を設けた、④のような本2階建が急増します。本2階建が増えた結果、虫籠窓はガラス窓に変わり、窓には手摺や雨戸などが付き、2階部分がより機能的になりました。

このように、2階の高さと木材の太さが、外観から時代を判断するポイントとなります。